

ボストン美術館共同企画 特別展

南都仏画

よみがえる奈良天平の美

Special Exhibition of Buddhist Paintings from the Nara Museum of Fine Arts, Boston







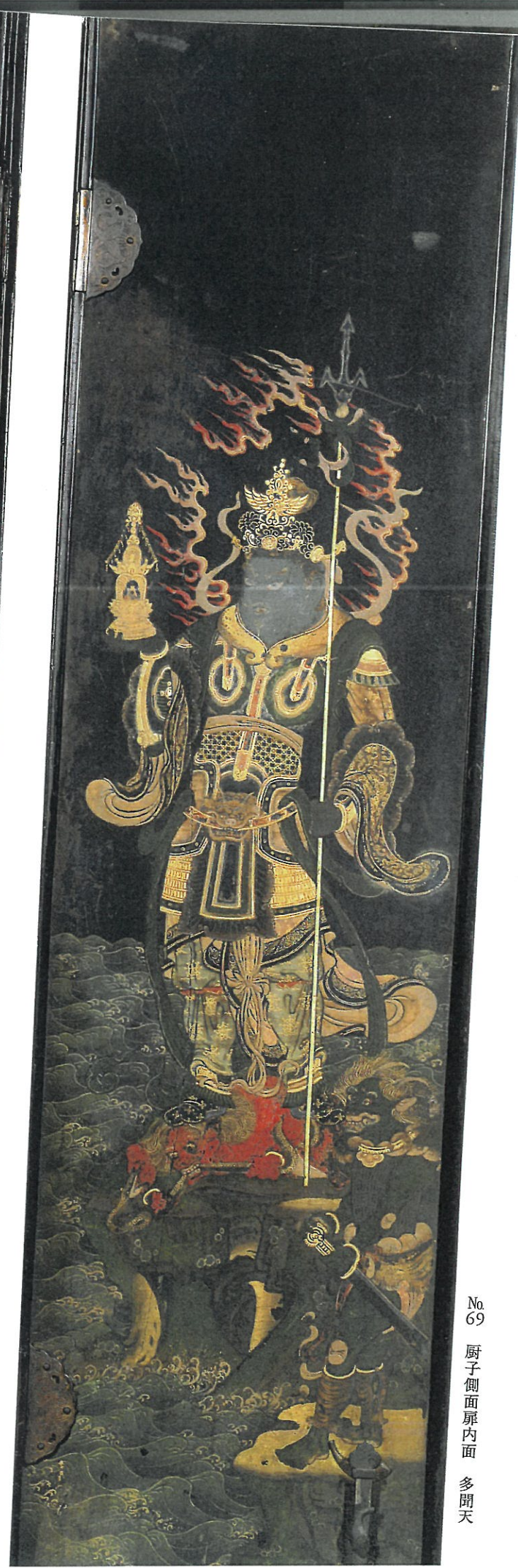
同右 広目天



同右 増長天



同右 持国天



No 69 厨子側面扉内面 多聞天

四天王像 四面

重命筆
絹本着色

〔持国天〕縦一四七・一 横七二・四
 〔增長天〕縦一四八・八 横七二・七
 〔広目天〕縦一四八・七 横七二・三
 〔多聞天〕縦一四八・三 横七三・二
 鎌倉時代 建長五年（一二五三）頃
 ボストン美術館

海中の岩上に立つ四天王を、四面の幀装に描く。四天王はそれぞれ二邪鬼を伴い（あるいは踏みつけ）、各面とも左右に大きくなびく光背の火焰、風をはらんで大きく翻る着衣、高くうねる波浪など、誇張された激しい動勢表現を示している。持国天は刃先を下に向けた剣、增長天は刃先を上に向けた剣、広目天は筆と紙、多聞天は宝塔と戟を持物とする。本図については、奈良県天理市にかつて壮麗な伽藍を誇った内山永久寺の記録である「内山永久寺置文」〔No.63〕の記述により、同寺真言堂の仏後障子裏面に貼りつけられていた四天王像に相当するものと考えられている。各面とも画面の損傷が著しいのは、かつて障壁画だったことに由来するものとみられ、近年実施された修理の過程で、壁に絵を固定するために打ち付けた金具跡とおぼしき穴も見つかっている。永久寺真言堂の四天王像は、建長五年（一二五三）に南都絵所の絵仏師・重命によって描かれたものだが、実際、重命が彩色を担当したことが墨書銘によって判明する永久寺旧蔵の不動明王および八大童子像〔No.72〕には、本図と共通する文様が施されている。

四面のうち増長天像については、持物や姿形、光背の火焰の形態や着衣の衣文など細部に至るまで、興福寺所蔵二天像〔No.70〕のうち持国天とされる一尊と図像が完全に一致することも注目される。この二天像は修理銘によって興福寺大乘院にかつて伝来したことが知られるが、永久寺は大乘院の有力な末寺だったことから、大乘院配下の南都絵所の絵仏師に継承された紙形が本図の制作に際して用いられ

荘に建つ大善寺（福井県坂井市）には、四尊とも本図とほぼ同図像の四天王像を扉に描く黒漆塗厨子〔No.69〕が伝来しており、大乘院内におけるこの図像の継承が確かめられる。この事実は、本図が大乘院末寺の内山永久寺旧蔵本である蓋然性をさらに高めるものであり、作例が極めて少ない鎌倉時代の南都絵所の基準作であることはほぼ疑いない。（谷口）

〔参考文献〕

柳澤孝「ボストン美術館蔵の四天王図 新発見の廃寺永久寺真言堂障子絵」『在外日本の至宝 第一巻 仏教絵画』毎日新聞出版、一九八〇年

69

木造黒漆塗厨子 一基

木製 黒漆塗 彩絵
 総高一四・〇
 鎌倉時代（十四世紀）
 福井 大善寺

正面と両側面に扉を設けた厨子で、大善寺の本尊・十一面観音像を安置する。同像は、寺の縁起によれば、鎌倉時代の弘長元年（一二六二）に、奈良・西大寺の観尊が発願したと伝える（実際は近世作とされる）。本品は江戸時代に補修されているが、大部分に当初の部材が残り、鎌倉時代の姿を今に伝える貴重な厨子である。

本品は上部に扁平な屋蓋を付け、その下方に欄間を設けた「春日厨子」と呼ばれる形式のもの。屋蓋が上下二段になっている形は他にあまり例を見ないが、各段に打たれた飾金具の作風に大差はなく、もともとこの構成であったとみられる。最大のみどころは、内部の奥壁や扉の内側に描かれた、今も鮮やかな色彩をとどめる彩絵である。正面扉には、頂上に楼閣がある山と海の景観を描き、観音の浄土・補陀落山を表している。奥壁は優雅に咲き誇る蓮の花と鴛鴦を描いた蓮池の景とし、両側扉には厨子内を守護する四天王を描いている。中に祀られる観音像を中心とした、すぐれた荘

これらの彩絵には、その図様に鎌倉期の南都で描かれた絵画作例と共通する特徴があることが指摘されている。なかでも四天王像は、建長五年（一二五三）に南都の絵仏師・重命が描いた内山永久寺（奈良県天理市。明治期に廃寺）真言堂伝来とされる四天王像〔No.68〕と図様が近似し、南都絵仏師との関わりがうかがえる点で注目される。大善寺の所在地はかつての大乘院領の河口荘に含まれ、南都とゆかりが深い地であったことが、その背景に想定される。南都絵仏師の活動範囲を考える上でも興味深い作である。（三本）

70

二天像 二幅

絹本着色
 各縦一三五・五 横九六・〇
 鎌倉時代（十二―十三世紀）
 奈良 興福寺

背景のない画中、鬼神を従えて水波に囲まれた岩場に立つ天部を描く二幅。両幅とも天部の背後では鬼が持つ鉾に括られた幡がたなびく。一幅は歯を見せて口を閉じる白肉色の天部で、腰の位置に構えた右手で剣の把を握り、左手は胸前で剣先に添える姿、もう一幅は口を開く赤みの強い肉色の天部で、右手は胸前で剣の把を握り、左手は腰の位置で掌を開く姿である。この二天の図像は重命筆ボストン美術館蔵四天王像〔No.68〕のうち増長天と持国天に近く、特に前者は非常によく一致する。ただし本品では前者が持国天、後者が増長天に比定されている。

天部の衣や鬼神の輪郭にはなめらかな肥瘦のある墨線を用いる一方で、甲冑や刀剣などは肥瘦の少ない落ち着いた筆勢を用い面部はより繊細に仕上げる。表側からの彩色は控えめで色を用いた陰影の表出が意図されており、当初は裏彩色を活かす描写が志向されたものとみられる。こうした描写傾向から本図は十二世紀末から十三世紀初め頃の南都の作と考えられ、十三世紀半ばの作である重命筆四天王